

Mark Twain の *The Tragedy of Pudd'nhead Wilson* におけるアブジェクション

ー パッシングは果たして悲劇だったのかー

大木 雛子

1. はじめに

本論では、マーク・トウェインの中編小説 *The Tragedy of Pudd'nhead Wilson* (1894) (以下 *Pudd'nhead Wilson*) におけるトム
の「パッシング」と、その原因となった彼とロクシーの母子関係に
Julia Kristeva によるアブジェクションの概念を適用することにより、
彼らの関係に母性と黒人性の要素がどのような作用をもたらしてい
るかについて検討する。さらには、トムとロクシーの母子関係にお
ける悲劇の性質を明らかにしていく。

既に杉山直子が指摘しているように、*Pudd'nhead Wilson* は同時代
の人種問題に対する作家の関心が色濃く現れた作品として捉えられ
てきた。自身と同様に奴隷の身分である息子トムを、ロクシーは主
人の息子と入れ替える。この入れ替えによってトムは白人としてま
かり通るようになり、無自覚ながらも実質上パッシングしていくこ
ととなる。このように、ロクシーの入れ替え行為は、まぎれもなく
トムのパッシングを誘発している。パッシングというテーマが
Pudd'nhead Wilson において非常に重要だということはよく知られて
いることである。では、本作品においてこの現象はなぜ重要なのだ
ろうか、そしてその重要性はどのように表出しているのだろうか。

黒人性と白人性の境界の曖昧さとその危うさを提示しているから
こそ、パッシングは重要な現象なのではないか。本作品では、ロク
シーがトムと主人の息子とを入れ替えることで、パッシングが成立
する。このトムのパッシングは黒人と白人の境界の曖昧さを露呈し、
人種境界自体の危うさを鮮やかに表象する。しかし、社会における
人種ルールは、ここで提示された現実の人種境界の底知れぬ曖昧さ

を、全くといっていいほど反映していない。そしてまさに、現実の人種境界と社会におけるそれとの、この奇妙な乖離こそがこの物語における母と子の悲劇の重要な引き金として機能しているのではないだろうか。

トムとロクシーの生きるドーソンズ・ランディングの社会では、いくら肌が白くても、黒人の血が一滴でも入っていれば黒人と見なされる。その結果として、母ロクシーから黒人の血を受け継いだトムは、黒人の要素と密接な関わりを持つ彼女との母子関係に対して嫌悪と渴望のせめぎ合う両義的な感情を有することとなる。このような、トムの内的世界における、母に対する嫌悪と渴望の両義的共存状態は、白い黒人である彼が白さを志向する時にますます強化されていく。

つまり、息子であるトムは、母ロクシーに対して母・黒人という二つの視点から両義的感情を抱くことになる。そして、この二つの側面から見た境界の危うさは、アブジェクションの概念を介して接続する。それというのも、アブジェクションという概念において、母親に対する両義的感情が最も重要なテーマであると同時に、トムのパッシングの原因はその黒人の母ロクシーなのだから。

ここで、本論におけるアブジェクションの定義について確認しておきたい。本論では西川直子の解釈に基づき、子が母親との融合的快樂に魅惑されながらも、同時におぞましきものとしての母親に嫌悪を抱く両義的感情として、アブジェクションを捉えることにする。

2. 貪り食う母ロクシー

序論で述べたように、息子トムを救うためにロクシーは彼を自分の主人の息子と入れ替えるという、大胆な行動に出る。物語の結末で、物語の題名となっている「間抜けのウィルソン」と呼ばれる弁護士デイビッド・ウィルソンが法廷で入れ替わりの事実を暴露するまで、彼女はトムが自分の息子であることを周囲に隠し続ける。

しかしウィルソンが事実を白日の下に晒すまでもなく、トムが本物の白人ではなくパッシングを行っているに過ぎないという現実を、

すでにロクシーは、当事者である彼に突き付けている。彼女は、トムの冷たい態度に怒った末に彼が本当は黒人であることを告げると同時に、トムの負債を無くすための計画を提案する。その結果、トムはロクシーを疎んじ、嫌悪を感じることになる。ここで、ロクシーはトムを救う計画を次のように提案している。

His mother approved of his conduct, and offered to help, but this frightened him. He tremblingly ventured to say that if she would retire from the town he should feel better and safer, and could hold his head higher — and was going on to make an argument, but she interrupted and surprised him pleasantly by saying she was ready; it didn't make any difference to her where she stayed, so that she got her share of the pension regularly. (54)

上の引用からも分かるように、トムは彼女の計画に従うよりも、ロクシーがドーソンズ・ランディングからいなくなってくれた方がよいと考えているが、そのことを彼女に言い出すことができない。したがって、母親ロクシーを疎んじているものの、恐怖と意気地なさからトムは彼女を 'mammy' と呼び、結局は彼女に支配されるまになる。

母親に対するこのトムの両義的態度に何らかの原因があるとすれば、Susan Gillman が「虚構のアイデンティティー」¹ と呼ぶ、ロクシーの虚構の創出がそれに当たるのではないか。ロクシーは、赤ん坊のトムを、白人の主人として大切に扱う。自分の息子であり、実は一奴隷に過ぎないトムが、主人の息子、つまり御曹司であるという虚構を、ロクシーは息子に向けて次のように提示している。

With all her splendid common sense and practical everyday ability, Roxy was a doting fool of a mother. She was this toward her child—and she was also more than this: by the fiction created by herself, he was become her master; the necessity of recognizing this relation outwardly and of perfecting herself in the forms

required to express the recognition, had moved her to such diligence and faithfulness in practicing these forms that this exercise soon concreted itself into habit; . . . (55-56)

しかし、彼女の言葉はトムに対して自身の作り上げた虚構を提示するだけに留まってはいない。ロクシーの虚構の創出は、彼女自身にも作用しているし、トムを中心とする周囲の世界をも改変してしまうほどの力を有しているのだ。

ロクシーは、トムを主人として扱うことにより、本来は奴隷であるはずの彼をドーソンズランディングの重要人物にするという逆転現象を引き起こしている。彼女はごく自然に、自動的に、息子を主人として扱う。そしてそのことにより、現実と虚構の境界を曖昧にし、社会の中でトムが御曹司として扱われることを、周囲から自然に受け入れられるよう促している。また、自身の心の内で、ロクシーは奴隷と御曹司の境界を不可視化している。ここで特筆すべきは、ロクシーの内外で行われている相互に反響し合う虚構の創出が、彼女の妄想内部にトムを引き入れてしまうということである。つまりロクシーは、トムを御曹司として祭り上げることで、自身の中にトムを内包するほどの力を振るい、母親としての暴力性を浮き彫りにしているのだ。

ロクシーの親的な力がトムに及ぼす影響は、彼の一生を後戻りできない悲劇に変えてしまうほどの暴力性を有している。というのも、もしもトムが奴隷の身分のままだったなら、彼は盗みや殺人を犯し、挙句の果てには川下に売り渡されるという三重苦を負わされなかったからである。確かに奴隷の身分は、屈辱的かつ非常な苦痛を伴うものである。しかし、トムと入れ替えられたチェンバーズは、結局のところ社会的罪を犯すことなく、トムとは対照的な平穏な日々を送っているように見える。そして、こうした対照的な二人の未来の行く末を決定したのが、ロクシーの親としての暴力性だったのだ。

そうしたロクシーの暴力性についてさらに分析していくと、そこには彼女の性格の自己中心的な側面を見てとることができる。ロク

シーの母性の自己中心的暴力性は、トムが川下に奴隷として売られてしまうくらいなら彼を殺してしまった方がよい、という彼女の言葉によく現れている。ロクシーは、トムの行く末について次のように嘆いている。

She paused awhile, thinking; then she burst into wild sobbing again, and turned away, saying, 'Oh, I got to kill my chile, dey ain't no yuther way,—killin' him wouldn't save de chile fum goin' down de river. Oh, I got to do it, yo'po'mammy's got to kill you to save you, honey'... (17)

ここでロクシーは、トムの置かれた悲劇的状况に咽び泣いている。この場面は一見、母親がその深い愛情から息子を酷く心配している、といった様子に見えるかもしれない。しかしこの場面の状況をよりよく分析してみると、そこにはロクシーの、トムのためならなりふり構わず行動してしまう自己中心性が現れている。トムの置かれた状況は確かに、川下に売り飛ばされてしまうかもしれないという悲劇性を帯びている。それに、その悲劇的可能性は、決して低いとはいえないだろう。だからこそロクシーは、息子の将来に危機を感じているのだ。

だがこの場面でトムはまだ乳児である。つまり、彼は言葉でロクシーと意思疎通を図ることができない状況にある。この段階において、トムは自己中心的で独断的なロクシーの行為に対して、賛同することも拒絶することもできないのだ。ここでのトムは、無抵抗のまま、母親によって自らの人生を支配・操作されているということになる。

他者に人生を操作された場合、操作対象となった人物のアイデンティティ形成に多大な影響が生じることは明らかであろう。そして、自らの人生が他者の絶大な支配を受けていたということを知る時、主体的意志が剥奪されたという屈辱、あるいは悲愴な恐怖がその内面に沸き起こったとしても、何ら不思議ではない。

ロクシーから、トムは全面的な支配を受けている。彼を主人の息子と入れ替えたということについてロクシーはトムに暴露する。その時、彼は自身の人生や存在が母に呑み込まれそうになっている、あるいは、すでに呑み込まれてしまっている、ということに気づく。次の引用部分は、そうした認識から生じるトムのロクシーに対する拒否反応を伝えている。

Roxana poured out endearments upon him, to which he responded uncomfortably, but as well as he could. And she tried to comfort him, but that was not possible. These intimacies quickly became horrible to him, and within the hour he began to try to get up courage enough to tell her so, and require that they be discontinued or very considerably modified. But he was afraid of her; and besides, there came a lull now, for she had begun to think. She was trying to invent a saving plan. Finally she started up, and said she had found a way out. Tom was almost suffocated by the joy of this sudden good news. (101-102)

ここで、ロクシーは母親としての愛情を打ちひしがれたトムに精一杯注いでいる。一方、トムは母親の態度をできる限り受け入れようとはするものの、彼女の馴れ馴れしさにおぞましさを感じ、次第に拒絶の感情を募らせることになる。しかしトムは、ロクシーへの恐怖心のために、彼女に対して拒絶の態度を示すことができない。

この母親は、彼にとってあまりに強大な存在なのだ。彼女はこれまで見てきたように、息子を救うためなら、彼の意志などお構いなしの行動に出る。こうしたロクシーの強烈な母性は、トムにとって脅威だといえるし、醜悪なものに映る可能性は大いにあるはずだ。だが、ロクシーが提示する救いの道に、喜びのあまりに息を詰まらせながら飛びついてしまう姿から見ても、彼がこの母親的な心に魅了されていることも確かである。クリステヴァのアブジェクションの概念は、そうしたトムの心理を、鮮やかに照らし出しているとい

えるだろう。

ある食物、汚物、屑、塵芥に対する嫌悪感。私の身を守る痙攣や嘔吐。汚穢、掃きだめ、不浄から私を引き離し、身をそむけさせる反感や吐き気。妥協、どっちつかず、裏切りの醜悪さ。これらのものへ私を導いてゆくとともに切り離しもする、魅入られたような不意の動作。(クリステヴァ 5)

この引用部分に現れているような、どっちつかずの反感や嫌悪感は、トムのロクシーに対する感情を端的に表しているといえるだろう。そしてそうした両義的な感情は、彼らの消し去ることのできない、黒人の血によって結び付けられた母子関係の緊密さが生み出したものである。トムはロクシーに反感を持ちつつも、あまりにも近接し過ぎているがために、彼女を完全に棄却し切ることができないのだ。

3. 穢れとしての黒人

前節では、トムがおぞましき存在としての母親ロクシーに、反感を抱きつつも、棄却し切れない状況にあることを分析した。そして、ロクシーの自己中心的心性が、彼女に対するトムの両義的感情の発端となっていることを明らかにした。第3節では、再びトムの視点から、暴力性と並んでロクシーの母性のもう一つの重要な要素である黒人であることについて論じていく。

黒人であることを、トムはどのように捉えているのだろうか。彼はまぎれもなく、自らが黒人であることに恐れを抱いている。トムは、自分が黒人であることが夢だったらよかったのに、と思っているが、黒人であるという現実、彼の身に重く耐え難く伸しかかってくる。彼は、黒人に負わされた白人との間にある「酷い差」“awful difference” (55) について絶えず嘆き悲しむのだ。

自分が本当は黒人であるということをロクシーから告げられる以前、自身が白人であるということに、トムは何の疑念を持っていなかった。白人として存在することは、彼にとっては当たり前のこと

だったし、自らの内に潜む黒人に気づいた後でさえ、周囲は彼を白人として扱う。白い黒人であるトムが白人としてまかり通ることは、前節で述べたようなロクシーの虚構の創出の効果の強大さと共に、人種境界の曖昧さを示唆している。

だが、黒さと白さの境界は見た目には曖昧であっても、特にトムに関しては、黒人の母親ロクシーから受け継いだ血を消し去ることは不可能である。トムが黒さを消し去ることができないのはなぜか。それは、ロクシーの母性と黒人性という二つの要素が、有機的に、緊密に絡み合っているからだといえる。前節でも述べたように、ロクシーはすべてを呑み込む強大な力を有した母親である。そしてそれと同時に、彼女は黒人である。母性に呑み込まれてしまいそうになるトムは、その過程においてロクシーと黒人の血を分かち合うと同時に、その血の黒さに恐れおののいているのだ。母親に対して、そして自身が黒人であることに対する恐怖は、トムの内面において分かち難く融合している。次の一節からは、彼が黒人であることに抑えられない嫌悪を抱いていることが読み取れる。

He brought home with him a suit of clothes of such exquisite style and cut in fashion—Eastern fashion, city fashion—that it filled everybody with anguish and was regarded as a peculiarly wanton affront. He enjoyed the feeling which he was exciting, and paraded the town serene and happy all day; but the young fellows set a tailor to work that night, and when Tom started out on his parade next morning, he found the old deformed Negro bell ringer straddling along in his wake tricked out in a flamboyant curtain-calico exaggeration of his finery, and imitating his fancy Eastern graces as well as he could. (30)

この一節において、トムは自身の東部風ファッションを黒人に真似されることを嫌がっている。黒人を嫌悪するトムにとってみれば、黒人が自分のファッションを真似するのは、自己の白人としての領

域が侵されるに等しいことなのだろう。

さらに重要なことに、トムはここで、自身の真似をしてくる黒人を拒絶することにより、無意識のうちに、黒人であることを遠ざけようとしている可能性があるのだ。トムの幼少期に、チェンバーズが彼の「黒人のお父ちゃん」(“nigger pappy”) のようだと、他の子どもたちからかわれた時の描写からも、そのことが読み取れる。トムは、「黒人のお父ちゃん」という表現に過敏に反応し、チェンバーズを持っていたナイフで、激しく突き刺す。しかしトムがいくら黒人であることを遠ざけ、自身を白人のカテゴリーに括り入れようと努力しても、社会規範はこの二つの人種を分け隔てる。この黒い血の一滴が分断する明らかに不条理な境界に、トムの葛藤の要因が根差していることは明らかである。

その内に潜む黒人性に気づくことにより、トムは自身の白人としてのアイデンティティが崩れ去っていくのを痛覚する。こうしたある種の同一性の崩壊現象は、クリステヴァのいう、アブジェクションにおける混沌状態を想起させる。

〔《私の世界》を奪われた私が失神し、取り乱しているにもかかわらず、私が幻想の内に描き出した異域を排除することができない時、〕おぞましきものに化するのは、清潔とか健康とかの欠如ではない。同一性〔アイデンティティ〕・体系、秩序を攪乱し、境界や場所や規範を尊重しないもの、つまり、どっちつかず、両義的なもの、混ぜ合わせである。(クリステヴァ 7)

ここで指摘されている同一性・体系、秩序の攪乱は、まさにトムの人種概念に関する混乱と呼応しているといえる。そして、人種境界に対する混沌としたトムの意識は、母親ロクシーに対する両義的感情をさらに複雑化しているといえる。

というのも、もしもロクシーが純粋な白人であったなら、彼女の自己中心的な暴力性が発動することはなかったと考えられるからである。ロクシーは白人ではない。彼女は白い黒人である。そして白

い黒人は、人種境界の両義性を強度に体现している。白い黒人というどっちつかずの状態は、ややもすれば白人と同一化できるかもしれないという淡い希望を抱かせるだろう。だからこそ彼女は、トムを白人の主人と入れ替えるという、暴力的で自己中心的な行動に打って出たのだ。

しかしそれと同時に、社会における黒人という人種の定義は、白い黒人に冷酷な現実を突きつける。人種における同一性の攪乱は、確かにそこに引き起こされてはいるが、有機的変容を刻々と遂げていく生身の人間にとって、社会規範によって提供される人種の定義はあまりにも矛盾した状況を生み出す。そして、この人種性の攪乱によって生じた黒さと白さの混沌の中に、トムとロクシーの母子は否応なく巻き込まれていく。

4. アブジェクト、キリスト、ロクシー

それでは、ロクシーは人種性の攪乱による、トムの憎しみの対象としてのアブジェクトに過ぎなかった、ということなのか。もしもそうであるならば、単なる人種的悲劇としての *Pudd'nhead Wilson* の一側面を再確認しただけに過ぎないだろう。しかし、ここでロクシーをキリスト的性格を帯びたアブジェクトとして捉えるなら、アブジェクトとしてのロクシーの意味の変容を、読者は目の当たりにするはずである。

まず、ロクシーのキリスト的性格を分析する前に、アブジェクトとしてのキリストをクリステヴァがどのように捉えているのかについて見ておきたい。クリステヴァは、アブジェクトとしてのキリストの表象について次のように述べている。

キリスト教における意識の分割にとって、その物質的な係留点と論理上の核心は聖体をカタルシスとする幻想のうちにある。肉体にして精神、自然にして言葉、真正な食べ物としてのキリストの身体は、自然界の食物（パン）を媒体として、私が分割されている（肉にして精神）と同時に、無限に凋落した主体で

あることを教える。私が分割され、凋落するのはわたしの理想たるキリストに対したときであり、しかも度重なる聖体拝領を通じてキリストを取り入れることによって、自己の不完全性を意識しながらも私は聖化される。アブジェクションを、貪り食うことの幻想として位置付けたキリスト教はこうすることでアブジェクションを解除する。以後アブジェクションと和解したキリスト教の主体は象徴界に完全に移行し、もはやアブジェクションの主体ではなく、凋落した主体となる。(クリステヴァ 166)

この引用から分かるように、クリステヴァは、キリストがアブジェクトとなることによって、キリスト教を信じる人々のアブジェクションが聖化され、解除されていることについて述べている。つまりキリストは、アブジェクトでありながらも、カタルシスをもたらす聖なる存在としても存在しているということである。ここで、キリストはアブジェクトでありながらも、同時に貪り食われる対象として機能している。

このキリスト的アブジェクトのイメージをロクシーに投影する時、トムとロクシーの悲劇は、微かなる明るみを帯びてくる。その時ロクシーは、単なる母としての存在を超越するのだ。Joe. B. Fulton が述べているように、Pudd'nhead Wilson には、ロクシーのキリストの性格を窺わせる描写が存在する。

Here, Roxy becomes a kind of black female Christ who redeems and ransoms her child with her own life, again saving him by switching him this time with herself as both instigator and object of the exchange. In both speeches, Twain poses the helpless situation of the children as the situation of humanity generally, and he offers in this satire of miscegenation and American racial attitudes the very real message that each person, whether black or white, depends upon the other person for life, liberty, and even spiritual

salvation. (Fulton 124)

この引用から分かるとおり、ロクシーはトムを主人の息子と入れ替えることで、ある意味においてはトムを救ったといえる。これまで述べてきたように、母親としてのロクシーの人物像には自己中心的な暴力性が見て取れる。そして、そうした強烈な暴力性が、トムの彼女に対するアブジェクションを引き起こしている。しかし、ここで確認しておきたいのは、ロクシーが単なるアブジェクトには留まらない、キリスト的性格を帯びたアブジェクトになり得ているということである。

彼女は、トムを救うために川下に売られる。そしてトムは、彼女と引き換えに金を手に入れる。このトムのロクシーに対するこうした仕打ちは、キリストを貪り食う人々を彷彿とさせると同時に、特にキリストを売り渡して金を得たユダを連想させる。ロクシーは、トムに向かって次のような言葉を吐き捨てる。

“What could you do? You could be Judas to yo’ own mother to save yo’ wuthless hide! Would anybody b’lieve it? No—a dog couldn’t! You is de lowdownest orneriest hound dat was ever pup’d into dis worl’—en I’s ’sponsible for it!”— and she spat on him. (114)

ここでロクシーは、ユダになぞらえて、川下に自身を売り渡すトムをなじっている。ユダの裏切り行為は、キリストの処刑という結果をもたらす。しかしキリストの死後、裏切り行為がもたらしたキリストの処刑には、人々に対する救いと赦しという意味が付与されることになる。ロクシーにキリストの姿が重ね合わされる時、トムの行動に蹂躪された彼女は、貪り食われる聖体だったことが明らかになるのだ。

5. 結論

ロクシーは、確かにおぞましきものである。母親である彼女は、

息子の運命を変えてしまう。トムにとって彼女が恐ろしい存在であることに、間違いはない。また、彼の恐怖の根底には白い黒人という存在の両義性が蠢いている。トムはロクシーを恐れているのだ。しかし彼は、彼女を棄却し切ることができない。それに、トムはロクシーをある面では、渴望してさえいる。トムはロクシーを憎み恐れると同時に、彼女からの愛情を踏みにじり、その存在を貪り食う。そして、この息子からの蹂躪により、母親ロクシーは、ありふれたアブジェクトに留まらず、キリスト的聖性さえも帯びたアブジェクションの対象となる。こうしたトムの母親ロクシーに対するアブジェクションは、クリステヴァのいう、「世界との唯一の荒々しい絆」(71) であり、「息苦しい渴望」(71) だったのだ。

Pudd'nhead Wilson は、単なる人種的悲劇を語るものではなかった。キリスト的アブジェクトとしてのロクシーは、穢れとしてしばしば捉えられる黒人の、聖性を帯びた側面を浮き彫りにする。本作品は、アメリカ社会特有の人種問題の両義性が、必ずしも悲劇的意味合いのみに留まらないことを示している。*Pudd'nhead Wilson* で展開されるトムとロクシーのアブジェクション的の光景は、絶望を越えた救いの光を読者に届け続けているのである。

注

1 ギルマンは、ロクシーの作り上げた虚構について、次のように述べている。

Roxana's authoring of fictional identities is strikingly like the process of composition outlined in Twain's preface to *Those Extraordinary Twins*. Like his story of the freak (or freaks), the "fiction created herself" proferates beyond her authorial control, creating unintended selves and scenarios and, finally, making the "fictional" —the "mock," the "imitation," the "counterfeit" —into the "real." (Gillman 74)

彼女の虚構のアイデンティティを創出は、偽物を本物へと変質させてしまうのである。

参考文献

- Fulton, Joe B. *Mark Twain's Ethical Realism: The Aesthetics of Race, Class, and Gender*. U of Missouri P, 1997. Print.
- Gillman, Susan Kay. *Dark Twins: Imposture and Identity in Mark Twain's America*. U of Chicago P, 1989. Print.
- Griffith, Clark. *Achilles and the Tortoise: Mark Twain's Fictions*. U of Alabama P, 1998. Print.
- Kristeva, Julia. *Revolution in Poetic Language*. Columbia UP, 1984. Print.
- Morris, Linda. *Gender play in Mark Twain: Cross-dressing and Transgression*. U of Missouri P, 2007. Print.
- Morrison, Toni. *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination*. Harvard UP, 1992. Print.
- Twain, Mark. *Sketches, New and Old*. Oxford UP, 1996. Print.
- . *The Tragedy of Pudd'nhead Wilson; and, the Comedy, those Extraordinary Twins*. Oxford UP, 1996. Print.
- クリステヴァ, ジュリア. 枝川昌雄訳『恐怖の権力』, 法政大学出版, 1980. Print.
- 杉山直子 『『間抜けのウィルソン』におけるもうひとつのパッシング』『マーク・トウェイン研究と批評』第14号(日本マーク・トウェイン協会2015年)85-95. Print.
- 西川直子 『クリステヴァーポリロゴス』講談社, 1999. Print.